
ひかりの音が聞こえる

平凡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひかりの声が聞こえる

【Nコード】

N0792X

【作者名】

平凡

【あらすじ】

電車の事故により、特殊な病気を患った鷹霧と川口という少年2人の話。

雑談

『2030年あたりから、「空想上の病」とされている数々の病に非常に似た症状の報告がきこえるが、日本政府、及び国際保健機関は無視を続けている。』

学校からの帰り道の、長くせにゆるい坂道を横ぎる交差点で、たかぎりやかくに鷹霧優薫は、よじや友達の四谷と、「謎の病」とかいうサブカル本を読んでいた。

メモライズ「不死病ってこれ、すげえな。」
あるページで四谷が言う。

メモライズ「不死病？・・・強いショックを受ける事で・・・んーと、いちじゅう、ひやく・・・1千万人に一人の割合で発病。寿命が飛躍的に伸び、何をしても老衰（約3000歳前後）まで死なない・・・うん、すげえ。」

この文を読みながら、鷹霧は、おそらく、この病気になりたいやつとなりたくないやつは、ぱつきり分かれるだろうな、と思った。

「ヤサはこれ、なりたい？」

四谷に訊かれ、「ぱつきり分かれる」とか思ってたくせに、意外と答えを出すのに苦戦する。

昔の夢は「ふろっふし」だったのに。

音楽を聴きながら

川口一は音楽を聴いていた。サカナクシヨンを聴いていた。かわぐちはじめ
隣で5組の四谷と鷹霧が何か本を読みながらしゃべっている。えらく興奮している。

「これはすごい。欲しい。」
とかなんとか四谷は言い、あわてて鷹霧が、「え、どれどれ」とか言っている。しばらく。

なんかガキみたい。そう思いつつも、耳はもはやサカナクシヨンよりもそちらに傾いていた。

「・・・心読病。ノイズ あらゆる人の心の中を読むことができる。強いシヨックにより発病。又、その際につけていた物を事後に装着した時のみ発病する場合もある。5千万人に一人の割合で発病する。」

まず川口の脳にひらめいたのは「インサイダー」とかいう横文字だったが、やつらは「あいつの好きなやつとか一瞬でわかるじゃん！」とか言ってる。

まったく。『全国統一中学生テスト2年の部』の全国4位がなにやってんだか。そろそろ行こうとしたところで考えた。

鷹霧優薫。あいつはこの学校でおそらく最も頭がいい。

馬鹿

結局、なにも答えられないまま、家についてしまった。呆然としながら廊下を歩く。

鷹霧は、3年前にこのマンションに引っ越してきた。札幌のなかでごちゃごちゃ動くのは嫌いだった。

それでも親は北区から豊平区に引っ越すと言った。

「だって南高が近いじゃない。」

知るかボケと思った。というかはつきりと口に出した。

で、この有様だよ。とちらりと窓を見る。

去年起こったインド洋沖大震災で、この札幌市で一番高級なマンションは、あっけなく耐震基準に引っかかったのであった。

その工事で、朝から晩まで雑音がひどい。

いまやその茶色い外見は、くすんだようにしか見えなかった。

そんな鬱な気分で、412号室についた。鬱というにはおおげさか。

一瞬でひとりぼっち

通学路に歩道は無かった。とぼとぼと、川口は道路の白線の上を、落ちないように歩いていった。

川口の通学路に、同じクラスのやつは他に1人しかいない。小学校が微妙な位置にあり、川口とそいつだけが切り離されたのであった。よって、いつも1人で帰っていた。

「今度遊ぼうな！」と、卒業式で川口に言ったやつは、スーパーで会っても、ぎろり、と川口を一瞬睨んだだけで、あの日の笑顔もなしにその日発売の週間少年漫画雑誌に目を戻した。袋の中の卵のパックが、かちやりと音をたてた。

小名木文房具店おなぎという、なにか買ったたびに消しゴムをおまけする店を越えたあたりで、対向車線から、自転車が坂をのぼってきた。

あいつだ。

黒石健斗くろいしけんとう。つぶらな、どこを見ているかわからない目。野球帽をかぶっていた。彼がただ一人の。噂の。あいつだ。

彼は、一瞬で川口の横を通過した。赤いスポーツタイプの自転車に乗っていた。

C R O S S A

鷹霧は今日2軒目の塾のまっさい中だった。こんな感じで、毎日2〜3軒の塾をはしごするのが日課だった。

7:30に二次会は終わる。今は7:05分だ。ちくしょう、この約30分間が長いんだよ。ーそう思うのも日課の1つになっていた。

ぼんやりとベージュ色の壁をながめた。

三次会は8:30からで、それまでに3駅分の移動、そして夕食をとらなければいけなかった。木曜はフィレオ・フィッシュとジンジャーエールのセットと決めていた。

そして地下鉄は、レーザーガンのような音をたてながら、定時にきた。おまえも日課をこなす仲間だよ、とこっそり、しかしいつも彼にー地下鉄に愚痴をいった。アホじゃないかな、と思いつながら。

座れるかな、と期待する。

そして鷹霧は、栄町行き東豊線に乗った。

大通でおりるんだよな、というものを再確認した。

しかし鷹霧の日常は、ぐんにやりと曲がることになった。たとえば、反比例のグラフのように。

川口はいつも寒色系の服を着ている。

だって俺が赤とか黄色とか似合わないし、だいいち気持ち悪い。とひとりで理由づけした。そして、断定した。

ただ、今自分が着ている紫という色はどちらなんだ、と誰かにききたかった。だれにきくのさ。といわれると、すこし困るが。

今日は5日だった。11月5日。

毎月5日は音楽雑誌の発売日だった。しかし、それを買うには札幌までいかないといけなかった。

「めんどくせえ」

そうつぶやきつつも、しつかりとすでに出かける準備はしていた。7時もまわっていたので、食料を調達しないといけなかった。親は・・・といっても親父は川口が3歳のときに交通事故で死んでいた。母は習字教室だそうだった。

「なんか、さびしっ。と言ってから、なにいつちゃってんの。と苦笑いした。

それから川口が福住駅についたのは30分後だった。遠いんだよ！と舌打ちした。

ここは終点なので、電車を待つことは少なかった。いまはその少ない1回だ。

駅は異様な静けさだったがそれを撃ち抜くかのように電子音がなり、地下鉄東豊線、栄町行きは来た。

7時42分発だ。ここから札幌までざっと15分。

しかし大幅に札幌につくのは遅れる事となった。

追加

地下鉄東豊線栄町行きが月寒中央駅で事故をおこしたのは11月5日の7時44分のことであった。

「んー、あいかわらずジャストだなあ。」

と、林は苦笑いした。

「おい、君」と笑顔で、電車につつこんだ男に声をかける。 - 生きてんだろ？おまえ。

まあ今はそれどころじゃないや、ときよろきよるする。乗客は全員降りているはずだ。

ああ、いたいた。ふふふ、君はこんなときでもMUSICか。それに比べてそつちは割とミーハーだね。好きになるのはもっぱらくだらないアイドルでしょ。

さて、と。どう声をかければいいかなあ？

わからないし、うまくいく、という確信があったので、ストレートに言おう。

近づくと、明らかに彼は警戒していた。青のヘッドフォンを外して、言う。

「俺に何の用ですか」

「・・・君はいま、とつても困惑してるだろ？」

「そりゃ誰かわからない大人に声かけられたら、誰でも困惑しますよ。きつと。」

「そうゆうつまらない話じゃなくてさ。・・・例えば、ぼくの名前をあててごらん？あたったらファンター本おごるけど。」

俺の名前は、林です。心のなかで、割とゆっくりと言う。さあ、どうだい？

「・・・」

「そのヘッドフォンをつけてみな。」

ごそごそと彼はヘッドフォンをつけて、間髪いれずに言った。

「・・・林さん、ですか？」

くつくつく、と笑いながら、正解だよ。という。

「やっぱりか。」と彼はいった。ため息つきで。

そうだよ。君は残念ながら心読者ソイザーになっただ。と心のなかで言った。

ちよつとこつちに来てくれる？というと、いや、でも家が・・・と拒否した。

「大丈夫。僕の予想だと、今日は家にお母さんは帰ってこない。
なぜわかるかって？僕は未来予知者アントロイドだからね。」

「もう1人いるんだよ。患者が今日は。」

混乱

「『この男は何を言っているのだ』っておもってるだろ。」と、名前は知らないが、なんとなく顔は見たことのある奴が、顎あごをウインドブレーカーに隠しながら言った。

はい、そうですとも。鷹霧はカフェオレ色のジャンパーのポケットに手をつっこみながら考えた。こいつらは何者だ？

「ああごめん。僕は林。この子は・・・」

「川口です。」おのおの自己紹介され、しょうがないので鷹霧もしようとする、

「めんどいならいよいよ、鷹霧君。」

何故おれの名前を知っている。

「そりゃ警戒するよね」と、俺の心を読んだかのように、黒縁眼鏡の知らない男が言う。

はつきり言っちゃうとね、と。「僕は、ある程度先の未来のことがわかる、『不可視現実病』ファスト、簡単に言っちゃえば未来予知ができる、未来予知者なんだ。アンドロイド」

え。とまぬけな声を思わず出してしまう。なんじゃそりゃ。

「信じらんないよね。」と、へにやへにやため息するシーンは映画で何回も見た。そしてそのあと、そいつはこう言うんだ。

「けれども、」ほらね、やっぱり。

今度こそずばつと言います、と勝手に宣言してから、男は「君は、とゆつくり言う。ごくり、と息を飲む。

「君は、不死病メモライズっていう病気に、ていうか能力をつけちゃったっばいんだよ。僕の未来だと。」

少しだけ睨む。

「はつきり言って」「信頼できない。」「最後の部分はヘッドフォン野郎と八毛った。ヘッドフォン野郎が『ヘッドフォン野郎』はあんまりだ。」と、ぶつぶつ言ったが、今回はシカト。

あああああああああっ！！なんだよこいつらはっ！

子供

学校で見る温和な鷹霧が、あきらかに殺気をたてていた。なんていうか緑のオーラっぽい。

「君、いつもの退屈な生活にうんざりしてるだろう。」鷹霧は眉をひそめた。

たしかにそうだけどさあ。と、心のなかでいったようだ。へえ、そうなんだ。

「このビビリがつー!」

「はあ!？」鷹霧ははつきりと声にだしていった。気分的には鷹霧の味方だ。今このタイミングで言うか!？それ。

と、突如「ぐう」と漫画的表現なおなかの音がする。林だ。今このタイミングで鳴るか!？それ。

まあ、おなかもすいたし、座りながら話そうよ。とのんきに林はいう。確かに今までずっと駅構内で立ちっぱなしで川口も疲れていた。だいいち真横は事故現場である。渋々、というかんじで鷹霧も同意する。

「どこがいい?」

だからあんたはのんきすぎるんだよっ!!ガキかつ!!

結局、希望も特になかったので、そこらへんの喫茶店に入る。

自分と鷹霧はジンジャーエールで、林はオレンジジュースだ。今の子供はかつこいいもの飲むねえ、と林が苦笑いする。

「それで、だ。どうすんの?」まだドリンクも来てないのに。

「親が心配します。」と、まっとうな理由をつけて鷹霧が断る。

「きみの両親は今日、演劇を見にいってるはずだ。」勝ち誇ったように林が言う。案の定、なんでそれを、と焦っているようだ。顔にでてる。

焦る鷹霧か。いま俺めずらしいもん見たぞ。

「ていうか、なんで僕、ビビリ扱いなんですか。」

静かに、しかししつかりと鷹霧は言った。どうやらさっきの林の発言にややご立腹のようだ。

「だって、現状に満足してないのに、そこから逃げてるってことは・・・ビビリでしょう?」

でも僕もあんまりひとのことが言えないんだけどね、と苦々しげに林はいった。

鷹霧はしたくちびるを噛んでいた。

ドリンクがきた。

けれども、気まずい間は続いて。

川口は無意識のうちにおしぼりをいじくっていた。だれかどうにかしてくれ。

今日。

ひとりごとのように林は言った。形容詞的には「寂しい」感じだ。林はどこか遠くを見ながら言う。

飛び込んだやつがいただろ? あいつはね、僕の患者のひとりなんだよ。

そこで彼はオレンジジュースを飲んだ。氷が、からんと音をたてる。

重いつてのはこんな感じか。と、鷹霧までのんきなことをいいます。

目の前のジンジャーエールがしゅわしゅわいつている。

彼のなまえはね、黒石護君くろいしまさむね。かっこいい子でね、タレントやってたの。

過去形かよ。ヘッドフォンから鷹霧のこころのこえがきこえる。

ちよっと待て。黒石って今おまえいった?

まぬけ

つい2、3時間前に読んでいた本の話がリアルになるなんて、予想もしていなかった。この世界というものはずいぶん奇蹟とかいうやつがおこりやすいな、と鷹霧は思った。というか、半ば呆れていた。だいたい、予想できるやつなんているか？・・・おれの目の前でオレンジジュースをすすってるやつを除いて。

そいつは黒石の、黒石護の話の続きをした。- 遠い目で。視線はちらちらとゆれていた。あきれているようにも、怒っているようにもみえた。

「彼がね、僕の患者さんになったのは、6年前のこと。ぼくはまだ23歳だったなあ。・・・意外とふけてるでしょ。びっくりした？」

そうゆうのいいからはやくつづける。29歳としての態度で。

「彼はね、卒業式ですっころんで発病することになってたんだよね。」

「いやあ、見事なマヌケっぷりだったよ、と奴はにやにやした。と
「どうか、何の病気だ？」

「安心して、彼はまだ死んじやいない。・・・確実に。」

「ごとり、と音がした。隣をみると、川口がヘッドフォンをおいて
いる。」

「・・・彼も、メモライザ不死者だ。」

おそろいだねえ、と林が軽く言う。

メモライザ頼む、少し黙ってくれ。

不死者いわれて、背中にいやな汗をかいているというのは、明らかに動揺している証拠だった。- おれはこの林とかいうちんちくりんな奴を信じるのか？・・・どうかしてる。

急にとなりの川口が、苦々しい顔でいう。

「黒石護は・・・黒石護には『健斗』という弟はいますか」

んー、とのんきにうなった林は、いるよ。とポケットからどんぐりが落ちたように云った。そのうえ、「たしか君の・・・ええと川口君の同級生でしょ」ともいった。

ため息をついた。ふたりとも。

そして俺は、残っていたジンジャーエールを一気に、ストローをつかわずにのみほした。

覚悟をきめた。

黒石家の庭は綺麗だろうか

黒石健斗にかかわってはいけない。そう思った。

黒石健斗はいつでも中2だというのに純白のブリーフで、すぐくわかりやすいマザコンだ。そして何かつぶやいている。

その内容は、つい5秒前に覚えた言葉か、中2病的な技の名前だった。

どうしよう。このつぶやきが、突如として「お兄ちゃん」とかいいはじめたら泣いてしまいそうにふるえる。

俺は、川口は小3から人前では泣かなくなっていた。のにもかわらず、だ。

林がぼんやりと言う。

「黒石護が自殺未遂を仕掛けたのはこれで6・・・いや7回目なんだよね。でそれで治療費とかが結構やっぱりかかるらしいよ。」

鷹霧君はこうなっている現状を知っているだろうか。今はトイレに行っているが。

彼はトイレに行く寸前、

「じゃああなたを信じてみます。」
と行ってトイレに行った。

訳もなく、財布を手でもてあそんでいた。
店の奥にあるトイレから鷹霧がでてきた。

「じゃあ行くのか。」

林がレジへ向かった。なんとなく気まずくて、鷹霧の方を盗み見したら、目があった。

顔

店から出て、果てしなく続くのではないか、というほどの長い、そしてまっすぐな地下街を深夜に歩いていた。男三人が約3m間隔で列をなしていた。かなりstrangeな光景であっただろう。

いい加減夜である。地下街はシャッターがおり、人は一人で無表情で歩いていた。この人達は何を考えているのだろうか、と3m先をゆく川口を見るが、ノーリアクションだ。

シャッターとシャッターのすきまほどの、地上に出るための階段があった。少し冷んやりとした空気が流れている。

ずいぶん急な階段だ。思わず無言になる。・・・いや、正確には店をでてから一言もしゃべっていない。

膝がわらう。ふと上方を見上げると林が出口で立ち止まっていた。驚く事に顔が笑っていない。

今にやにやしないでするんだよ！とひとりでイラっとする。

風は冷たかったが、空は澄んでいて、冬が近いことを匂わす。駐車場はそこから2分ほどで、真っ赤なスポーツカーが一台だけ停まっている。・・・冗談だろ？

いまさら林がにやにやしている。
なんでついて来たんだろ、俺。

くるまのなか

川口は目を見開いた。目の前には真っ赤なスポーツカー。

おいおい、嘘だろ？

「まあ乗ってよ。」

林はにやにやしながら言う。どうやら心の中では「どやどやどやどや……」と流れているようだ。

……別に自慢してもいいけど事故だけはおこしてくれぬな、と思いつつその真っ赤なドアに触れた。が、あわてて手をひっこめる。

そうこうしているうちに、あっさりと鷹霧は車に乗っている、というのを乱暴に閉まるドアの音で知った。え、ためらいとかない訳？

二人は後部座席に乗って、それぞれ窓の外を見ていた。

ばん。と所有者である林も乱暴にドアを閉めて。

「しゅっぱーっ！」

と林一人だけテンションを上げて車は走り出した。

どれくらいたったであろう。車は住宅街を走っていた。車の中は場違いにも、the telephonesでノリノリだった。車の中の空気は凍りついている。

そんな空気の中、おれは「KYって何年前の言葉だっけ」とぼんやり考えていた。

そして、なんでおれはこの男を信用し、その車の中にいるのだろう、と思った。普通の人なら、鷹霧のような反応だろう。

「あと15分ぐらいでつくよ。」

林が唐突に言ったので、おれは悲鳴をあげそうになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0792x/>

ひかりの音が聞こえる

2011年11月22日02時00分発行